

碩心

社団法人 日本詩吟学院岳風会 認可
神奈川 碩心会 発行

現在会員数 178名
6月地区別 278名
6月地区別 65名
6月地区別 (521名)

62年6月号 (179号)
発行者 萃岳
編輯者 愛岳
中村

象山先生 生誕の地を訪ねて

一 柳道風

青葉の五月下旬、私のかねてからの念願であった象山先生の生誕の地、長野県松代町有楽町に一人旅し、先生を如何に呼んでいられたかをたしかめてみました。

吟友の皆様には今更何をとと思われる方もあるかと存じますが、敢えて若き世代の人達にも少しでも参考になればと思い記述してみます。洪湯泉に一泊、翌朝九時に宿を出て、長野電鉄にて一路象山口駅に行くため、湯田中駅で切符を買う時、私は敢えて「しょうざん口駅」を下さいと駅員に言う。と「ぞう山口駅」ですかと言われ、アッと思いましたが。第一声より「ぞう山」と聞かされ、其の後は路を訪ねる時は「ぞう山」と言うことになりました。この一言を以てしても、この地の人々がこよなく先生を慕われ愛されているかが解りました。

駅より歩いて十五分程で生誕の地へ。まず先生の祀られている象山神社へ参拝した後、今も残る生誕の家跡を見、昔を偲び、京都より移築した「煙雨亭」を見学。そして記念館で時間をかけて当時を偲ぶ遺品の数々を見、今更ながら先生の偉大さを心に

刻みつけられました。

先生生誕の朝は、東の空に明けの明星がひときわ美しく輝いていたとあり、幼名を啓之助と呼び、長じて啓・子明・大星・明などと称したのも皆その明星に因んで名付けたのだと言う。中国では古くから明星のことを啓明と言うからであると記されておられます。其の後晩年、和歌には衡樹・書簡には呉瀉または恪二郎・恪と書いていたそうです。象山の雅号は天保七年(一八三六)二十六才の頃より使用したもので、其の他にも滄浪・曲水・觀水・懷貞・清虚・北阜の雅号を用い、養性齋とも称していたとあり、只々驚くばかりでした。

ではどうして「ぞう山」と呼ぶか、其の根拠はと言いますと、先生ご自身の書き残された象山説を見れば「私の家の西南に大きな丘が聳え立っている。その形があたかも象に似ているので、土地の人は此の丘を指して象山と呼んでいる。そこで私は其の象山を自分の号とした」という意味の事が記されています。

ではなぜ「しょう山」と呼ぶ人がいたのか少し述べてみます。象山説の中に或る人が私に、先生は資質が非凡で天下ごとは一物なんでもできないことはないと言われています。宋の「大儒陸象山」にも比較

すべき英雄の士で先生の号はおそらく陸象山からお取りになったのでしょ々と問うたら、私の号は陸士とは関係なく象山という山名からつけたものであると言われたと言う意味の逸話が揚げられています。他にも色々事細かく理由付けられています。以上の通りで、私も名前の呼び方によって其の人の価値が変わるわけではなく、要は其人を正しく理解し評価する事の方が、より大切であると思えました。呼び名に関しては数多く書きたい事がありますが、期する所は一つだと思えました。

道風信濃路の旅より

昭和六十二年度

碩心会理事會開かる

と き・62年5月22日(金)午後7時より

と ころ・桜山下会館

- 一、開会の辞 小峰桜岳
- 二、碩心会詩合吟
- 三、会長挨拶 根岸岳萃
50周年開催について皆さんの協力をお願いする。
5月現在会員数521名となったが今後益々会員がふえる様努力してほしい。
- 四、相談役挨拶 三井岳朧
会員が和を以て仲良く碩心会を大い

五、議事

にもりあげてほしい。退会する方がない様支部長さんの協力をお願い。

イ議長選出並に書記任命(議長・根岸岳萃 書記・村田滯岳) 議題

1. 61年度決算報告 井沢潮岳
2. 会計監査報告 井沢潮岳
会計監査の結果相違なしと認む
3. 62年度予算(案)審議 全員挙手承認
4. 報告並びに連絡事項
逗子地区区長 千葉劔岳
逗子地区現在9支部177名
逗子地区温習会、逗子吟舞連盟の春秋の行事があり、皆様の協力により支障なし。
葉山地区区長 沼田汎岳
葉山地区14支部275名、皆様の協力をお願いする。
大船地区区長 森田暁岳
大船地区4支部63名、今年は10月に大船地区大会があるのでよろしく御協力の程。
総務部長 加藤圭岳
プリントにより行事予定説明
7月5日選拔者大会入場券は不要。
御希望の方はどうぞ。(九段会館)

6月7日青少年大会が逗子図書館ホールで行われる。応援の程。

許証部長 中村幸岳
許証料は支部毎にまとめて納入を。高段者許証料はなるべく早く。

教務部長 竹石憲岳
毎月最終月曜日に指導者講習会を行う。総本部夏期講座8月1(土)2(日)日で、申込は6月20日迄に竹石方へ(受講料六千円) 木

企画部長 千葉秀岳
初吟会は盛大に行なわれ、皆様の御協力に感謝。来年は葉山地区の担当につきよろしく。

広報部長 中村愛岳
今年の8月で発刊以来満15年。マンネリ化しないためにも皆様の原稿をお願いします。

5. 其の他

50周年大会準備のため、6月1日に役員会を開く。下見に行かれた役員の見解を聞き、各部門に分れ話合。

六、閉会の辞

加藤岳相
碩心会発展のため、又50周年記念大会を無事終る様、皆様の御協力をお願いする。

第14回県本部

青少年吟道大会開かる

晴天に恵まれた六月七日、右会が逗子図書館ホールで行われました。傾心会より独吟(1)・合吟(1)・親子吟(4)・コンクール(1)・立休吟(1)の出吟があり、小さい子供達が元気に一生懸命がんばっている姿に感激いたしました。

はじめて行われた親子吟も29組あり、親子兄弟の吟あり、親子孫三代の吟もあって家庭の円満な様子がうかがえ、すばらしい企画だと思いました。

コンクールは少年の部・青年の部に分れ吟声を競いました。

式典では、総本部青少年育成委員長、今村岳仁先生の祝辞があり、青少年育成の為に協力してほしいとお言葉がありました。

招待吟、県本部役員吟詠、青少年部役員育成委員吟詠があり、合吟コンクール結果発表並びに表彰が行われました。傾心会は三位に入賞いたしました。

閉会の辞、万才三唱で本日の盛会をよろこびあい解散いたしました。

子供達は学校や塾などがあって、詩吟の勉強も思う様になりませんが、今日の入賞のよろこびを胸に、益々吟にもがんばって

くれる事を期待しております。

(独吟)

道灌蓑を借るの図に題す

(合吟)

道灌蓑を借るの図に題す

(詩舞吟)

ひえつきの歌

(親子吟)

関山月

(親子吟)

桂林荘雑詠諸生に示す

(親子吟)

九月十三夜

(親子孫吟)

富士山

(コンクール)

九月十三夜

勸学

事に感ず

勤学

青少年副部長

泉副本部長

(村田澁岳記)

松尾芭蕉

俳句：といえは芭蕉を語らぬ人はいまい。芭蕉の真価は俳句という短い詩に打込んだ彼の魂の全部の真剣さ、つまり彼の人間に深みがあるのである。

松尾芭蕉(一六四四—一六九四)という人間を知るのには、まず彼が病身であったという事を忘れてはならない。壮年三十にして老人の如く白髪があり、生涯痔疾で直立端座が難しかったといわれている。彼が生きていた元禄時代は、武士も町人も最も平和で享樂的な時代で、西鶴の好色物や、近松の情死物などが洛陽の紙価を高めていたのに、彼ばかりはどうして孤独の旅を好み、人生の悲哀に沈滞したのであろうか。彼が冥想的な淋しい風流というものに変えてしまったのは、彼の病弱というものに変えきかそうさせたので、彼は時代の流れを逆行した。

芭蕉の文学の師は、沈痛な詩人杜甫と、旅の詩人西行といわれ、芭蕉が病弱な身にも拘わらず、奥の細道の旅行に出かけたのも彼自身旅が好きだったこともあるが、西行の跡を慕ったのであろう。取分きて 心も染みて汗えぞ渡る

三橋 香織

池田亜沙子

菅田 光子

梅田可奈絵

三橋 香織

根岸 由佳

根岸 啓山

中村 豊泉

中村 亜希子

森 美泉

森 亜紀

矢嶋 悦岳

矢嶋 且

根岸 秀岳

根岸 啓山

根岸 由佳

池田亜沙子

菅田 光子

梅田可奈絵

加藤 圭岳

根岸 岳萃

衣河見に来ける今日しも

山家集にある西行の此の歌を読んで、奥の細道の次の文を読むならば、芭蕉の心に常に通っていたものは、西行と杜甫の面影であつたと想定される。

借も義臣すぐって此の城にこもり功名一時の叢となる。国破れて山河あり城春にして草青みたりと笠うち敷きて時のうつるまで泪を落し待りぬ。

『夏草やつわものどもが夢の跡』
国破れて山河あり……の杜甫の詩など芭蕉は旅に出れば折にふれ口ずさんでいたのではないか。

練吟メモ

○詩吟の年数だけはどうかやら人並みに重ねましたが、詩吟の発生年代も知らないで今日に至ってしまいました。吟のけいこの合間を、時にはこんな話題で過すのもよろしかろうと思ひ、口火を切ってみました。

○日本に漢字が伝来したのは、小学校で習った、応神天皇の十六年(二八六)百濟の博士王仁が、論語や千字文を伝えたのが始まりとなっています。それから約三百年後推古天皇の御代(五九二〜六二八)に、聖徳太子が仏教、儒教、漢文学の発展に大い

に貢献されました。やがて天智天皇の御代(六六八〜六七一)になって漢詩が大いに興り、宮廷貴族の間に盛んに行なわれたというのが、漢詩発達の初期とされています。

○奈良時代に入り、現存する日本最古の漢詩集「懷風藻」(七五一)が編集されました。その巻頭を飾っているのが大友皇子の詩です。古今の絶唱として称える学者もいます。昨年史跡から木簡が出土し、それに大友皇子と読み取れる文字があつて、新聞やテレビはにぎやかに報道しました。

○平安時代に入り、倭雲集、文華秀麗集、経国集など勅撰三集とよばれる漢詩集が続けて出ました。従って、この時代には既に朗詠に近いものが行われていたと、想像はされますが証する文献がありません。ところが、一〇一二年に和漢朗詠集二巻が編集されました。宮廷貴族の間によく朗詠された和歌や漢詩を集めたもので、漢詩文の句五八八首、和歌二一六首を併記したものです。この朗詠集が出たことにより、このころから漢詩や和歌の朗詠が流行し、存在したことが証明されました。

○古代の和歌や漢詩は、ともに即興的に歌われ、音楽としての要素を欠いていたので朗詠には当てはまりませんでした。ところが、奈良時代に中国から輸入された楽器(

琵琶、琴、笛、しょう、ひちりき)や音楽は、平安時代のころに至ってよりやうやく日本的に消化され、これに伴って催馬楽や今様が流行し、朗詠も行われるようになりました。

現在お正月に宮中で行われている歌会始めの様子はテレビでご承知のとおり、句の余韻を声の続く限り長く引いた詠法で、むかしの名残りをとどめているとのことです。平安時代は、漢詩も和歌と同様の詠法であつたようです。

○漢詩の詠法は、その後和歌の朗詠法からだんだんと変遷し、時代を経て詩吟となるのですが、今回はその発祥の経緯まで。

(入会)

802 関口恵風(再)葉山町堀内三九三

(堀内・C) (電)〇四六八―七五―二二八二

803 嵐田光泉 逗子市山ノ根三―二十一―七

(大船A) (電)〇四六八―七二―〇〇八六

(本名平二・北海道本部より)

804 内村 博 葉山町長柄一四―三一―五一

(長柄) (電)〇四六八―七五―七五八五

805 齊藤秀風(再)葉山町堀内三二一

(堀内・C) (電)〇四六八―七五―三三一九

(退会)

791 安達朋風(堀内・E) 273 佐藤翠山(堀内G)

石塚美邪子(二色A)